2022 年 11 月 08 日（火）

椿山荘 70 周年記念基調講演
「椿山荘と無鄰菴
―山縣有朋の自邸(144 歳)と別荘(126 歳)―」
加藤友規先生

ご紹介いただきました、加藤でございます。どうぞよろしくお願いします。
粟野先生のお話は大変分かりやすく、山縣有朋が造られた椿山荘ということで、さらなる深み、素晴らしさを味わわせていただきました。私からは「椿山荘と無鄰菴」ということで、まずこの椿山荘は山縣さんのご自宅であり、無鄰菴は京都の別荘であったということ、また椿山荘が 144 歳、無鄰菴が 126 歳ということで、それぞれの庭の特徴などお話できればと思います。

椿山荘については、とくに山縣さんが愛した水景についてお話しします。そして無鄰菴については、5 つの入園チケットから見た山縣さんの庭園観（山縣さんがどんなふうに庭を感じていたか）を見ていきたいと思います。そして次に、山縣さんが庭に託した思いというものを偲んでみたいと思います。では、始めさせていただきますね。

最初に少し自己紹介をさせていただきます。

私自身は、京都芸術大学の通信教育部で、大学院の日本庭園分野の教員をしておりまして、学生たち、社会人の大学院生たちに、日本庭園の専門教育に取り組んでおります。また通学部では、まだ二十歳前後ぐらいの若い学生たちに日本庭園を教えております。
それから私の家業は京都の老舗の造園会社で、植彌加藤造園と申します。こちら現在、120名スタッフがおりまして、日本庭園の設計、そして育成管理、また庭園施設を運営管理していくマネジメントといったところも専門的に取り組んでおります。「伝統から学ぶ・仲間から学ぶ」というキャッチフレーズのもと、仲間と楽しく、仕事に取り組ませていただいております。

また本日、皆様方のお手元にはこのような資料があろうかと思います。この中に『サラサラ通信』というものがありますが、山縣さんの別荘・無鄰菴で行われているイベント情報などがこちらに記してありますので、ご覧いただければと思います。

無鄰菴のお話は後ほど触れますが、先ほど粟野先生からもご紹介いただきましたように、まずは「なぜ椿山荘が造られたのか」というところを突き詰めていきます。
山縣さんがこの目白の台地を選ばれたのは、この場所から早稲田の方まで見渡せる大変良い眺望を備えており、なおかつ Y 字型の低地があり、さらにそこに水が流れてるという絶好の立地条件だったんですね。こうした場に惚れこまれて、山縣さんは庭園をお造りになられたのかな、と感じるところです。

そして明治 43 年に発行された『名園五十種』。ここに掲載された写真でも、高台のところ

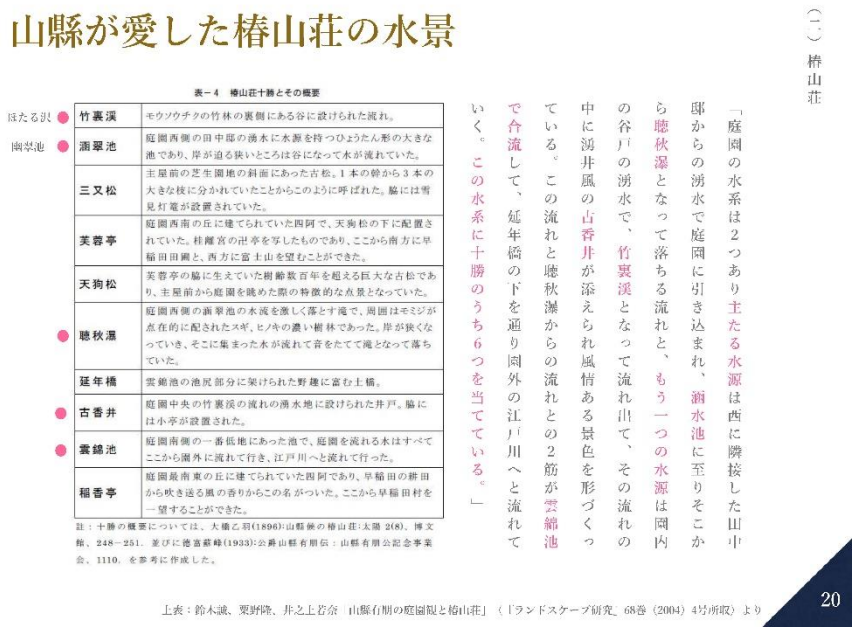
に本館があり、低地のくぼみが確認できます。まさにこういった姿を山縣さんが惚れて求められた、と感じるところですが、この『名園五十種』の中でも、椿山荘がたいへん評価されていることがわかります。

「真の天然趣味に富みたる庭を求めたならば、都下は勿論、恐くは日本においても、この山縣公の椿山荘の庭に右に出らるものは無いであらうと思ふ」

著者・編者である近藤正一さんは、山縣公の椿山荘の右に出てるものはいませんよ、これぞ、真の天然趣味に富みたる、と当時すでに絶賛しておられるわけです。
椿山荘が造営されてちょうど 20 年くらいたったこの頃、すでにこのように評価されているということがわかります。

さて、粟野先生のお話にありましたように、この水景の素晴らしさをもう一度復習しましょう。
山縣さん、40 歳の時にこの椿山荘をお造りになられました。椿山荘は、1 万坪と大きな邸宅でありますが、無鄰菴はその 1 割の約 1,000 坪ほどになります。無鄰菴は椿山荘の 18 年後、山縣さん 58 歳の時に造られて、二つ並べてみると、大きさは断然違うわけです。しかし一方で、二つの水系が交差して神田川に流れていくこの椿山荘、そして無鄰菴でも、東山の水を取り入れながら二つの流れが合流して下流の方に（瓢亭さんという料理屋さんの方に）つながっていく、こうした共有点をあげることができます。ぜひ皆様の方でも、椿山荘庭園をあらためてご覧になっていただくと、ああなるほど、二つの水の流れがこうして合

流しているんだな、ということを実感いただけると思います。むかし竹裏渓と呼ばれていたほたる沢からの流れと、この幽翠池からの流れが合流し、雲錦池の方へ向かって流れていく。ここに山縣さんは故郷・山口県萩の地形、すなわち阿武川から水が来て、そして松本川、橋本川へ流れていくというシチュエーションを重視されていたことが窺えますね。山縣さんがこの川の間のところで生まれたからこその椿山荘であるということは、鈴木誠先生、粟野隆先生、先輩先生方の研究の中でも指摘されていますが、我々もなるほどそうだな、という風に感じるところであります。
皆様のお手元にある庭園マップでも、山縣さんが追い求めた水景を感じていただけたらと思います。



山縣が愛した椿山荘の水景

（二）椿山荘

「庭園の水系は2つあり主たる水源は西に隣接した山中邸からの湧水で庭園に引き込まれ、涵水池に至りそこから聴秋瀑となって落ちる流れと、もう一つの水源は園内の谷戸の湧水で、竹裏渓となって流れ出て、その流れの中に湧井風の古香井が添えられ風情ある景色を形づくっている。この流れと聴秋瀑からの流れとの2筋が雲錦池で合流して、延年橋の下を通り園外の江戸川へと流れていく。この水系に十勝のうち6つを当てている。」

表－4　椿山荘十勝とその概要

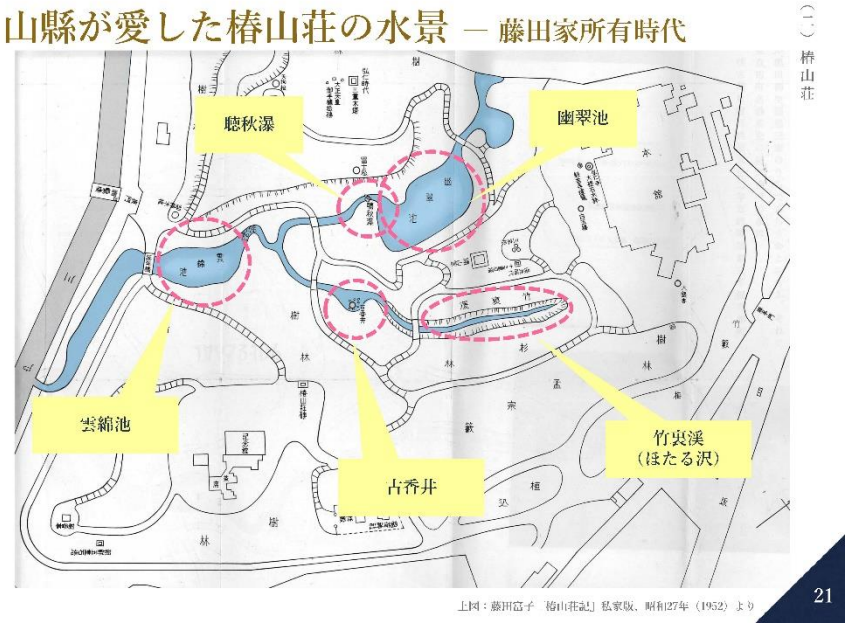
ほたる沢	竹裏渓	モウソウチクの竹林の裏側にある谷に設けられた流れ。
幽翠池	涵翠池	庭園西側の田中邸の湧水に水源を持つひょうたん形の大きな池であり、岸が迫る狭いところは谷になって水が流れていた。
	三又松	主屋前の芝生園地の斜面にあった古松。1本の幹から3本の大きな枝に分かれていたことからこのように呼ばれた。脇には雪見灯篭が設置されていた。
	芙蓉亭	庭園西南の丘に建てられていた四阿で、天狗松の下に配置されていた。桂離宮の出亭を写したものであり、ここから南方に早稲田田圃と、西方に富士山を望むことができた。
	天狗松	芙蓉亭の脇に生えていた樹齢数百年を超える巨大な古松であり、主屋前から庭園を眺めた際の特徴的な点景となっていた。
	聴秋瀑	庭園西側の涵翠池の水流を激しく落とす滝で、周囲はモミジが点在的に配されたスギ、ヒノキの濃い樹林であった。岸が狭くなっていき、そこに集まった水が流れて音をたてて滝となって落ちていた。
	延年橋	雲錦池の池尻部分に架けられた野趣に富む土橋。
	古香井	庭園中央の竹裏渓の流れの湧水地に設けられた井戸。脇には小亭が設置された。
	雲錦池	庭園南側の一番低地にあった池で、庭園を流れる水はすべてここから園外に流れて行き、江戸川へと流れて行った。
	稲香亭	庭園最南東の丘に建てられていた四阿であり、早稲田の耕田から吹き送る風の香りからこの名がついた。ここから早稲田村を一望することができた。

註：十勝の概要については、大橋乙羽(1896):山縣侯の椿山荘:太陽 2(8)、博文館、248－251．並びに徳富蘇峰(1933):公爵山縣有朋伝：山縣有朋公記念事業会、1110．を参考に作成した。

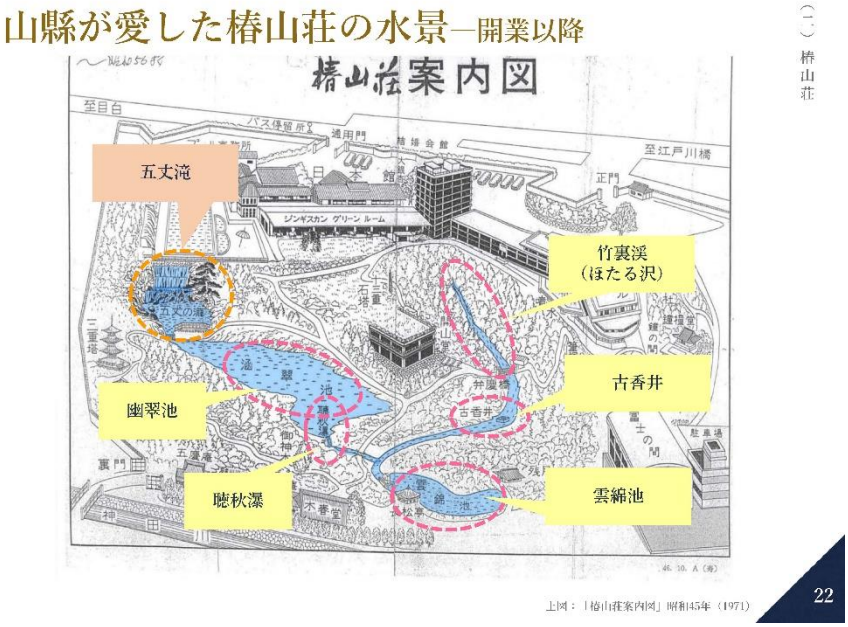
上表：鈴木誠、粟野隆、井之上若奈　山縣有朋の庭園観と椿山荘」（『ランドスケープ研究』68巻（2004）4号所収）より

20

そして、鈴木誠先生、粟野隆先生が日本造園学会に投稿されてる研究論文の中で、「椿山荘十勝」というものが記されています。日本庭園では、昔から名所（などころ）といわれる全国各地の名所をお庭の中に取り込み、それらに対して「八景、十景、十二景」というかたちで銘々呼び名を付けたりするのですが、ときには景という言い方をしたり、ときには景勝地というような言い方をします通り、勝と景、これは同じ扱いなんですね。中国の「瀟湘八景（しょうしょうはっけい）」へと通じるものなんですが、椿山荘の場合は、「椿山荘十勝」というかたちで山縣さんがお住いの当時定められました。
とくに注目すべきは、なんとこの十勝のうち六勝が水景だということです。しかも、その5つが現存している。今を生きる私たちも、山縣さんが味わった椿山荘十勝のうち五勝を味わうことができるんですね。



椿山荘は、大正 7 年に山縣有朋さんから藤田平太郎さんにお譲りになられた。その藤田さん時代のこの地図の中で見てみますと、やはりこのように幽翠池があります。そして聴秋瀑を経由して、雲錦池のほうに水が流れていきますし、こちら竹裏渓（現在のほたる沢）のところから古香井、ここを通って、雲錦池に流れていきます。二本の水の流れが一本になって神田川にそそいでいる様が藤田さんの地図からも見て取れますね。



さあ時が下がりまして、先の大戦、昭和 20 年の 5 月の東京大空襲の火災でこの椿山荘も

たいへんな被害にあいました。その庭園を再興されたのが、藤田観光の創業者でいらっしゃった小川栄一さんです。小川さんの努力で、昭和 23 年からどんどん整備をされ、その再興がやっと叶い、庭園がよみがえり、昭和 27 年 11 月、椿山荘が宿泊施設、料亭として開園いたしました。今から 70 年前の出来事となるわけですが、その時の姿を当時の案内図で見てみても、やはり竹裏渓から古香井へ水が流れてきて、そして幽翠池から聴秋瀑へ流れて、やがて合流し雲錦池の方へと続いているのがわかります。
とくに着目すべき部分は、この五丈滝です。ここに描かれているように、昭和 40 年に、改めて五丈滝が建設されることとなりました。椿山荘がホテルとなって、新たにこの滝を設けられたというのは意味深いですね。と言いますのも、幽翠池の上流のところに新たに滝を設けて、山縣時代からの水景をさらにさらに紡いでいく、そうした姿にホテル時代のブラッシュアップが見て取れるわけですね。

五丈滝は、当初このような姿に造られまして、昭和 58 年になりますと、今の我々がおりますバンケット棟が建設され、それに伴い、滝の方も改修なされました。そして、現在の五丈滝の姿が誕生したというわけです。

現在の五丈滝上段　―テラスから望む

（一）椿山荘

2022年8月撮影

28

このカメリアのお部屋ではよく披露宴等されてらっしゃいますね、ここから眺めた時の五丈滝の上段が、すごく美しく映えていますね。ガラスの方に近づいて眺めましても、このように素晴らしい五丈滝が見て取れます。五丈滝の上段をテラスから見ていただいても、なかなか味わいがありますね。風情があり、迫力がある空間です。

五丈滝上段―改修時（昭和58年）の姿

（一）椿山荘

昭和58年（1983）竣工

『庭　別冊42―特集・日本の庭園作家』建築資料研究社、昭和60年（1985）より

30

昭和 58 年に改修された時の姿です。当時から五丈滝の姿を遠望できたわけですが、ぜひ皆

さま方も、スカイテラスの方からもご覧いただきたいと思います。椿山荘が造られた当時、山縣さんは建物から早稲田の田んぼの方を俯瞰的に見ておられたわけですが、現在の椿山荘もこのスカイテラスの高台から、見下ろすようなかたちでこの五丈滝の上段を感じることができるというわけです。滝の前の紅葉もたいへん彩りがあります。滝の前にモミジがサラサラとあたっている。これは「飛泉障り」と言われる日本庭園独特の技法ですが、そういったものも感じ取れる大変素晴らしい庭です。
上空から見ても感じますのは、この五丈滝の水が、既存の幽翠池へと繋がっていく様の面白さです。山縣さんの水景がさらに進化したかたちで味わうことができるわけです。

山縣が愛した椿山荘の水景

（一）椿山荘

「ここからは本館の建物も見えず、前も後も昼なほ暗い杉、檜の山で、古香井のほとりには芦も生ひ、杜若（かきつばた）も咲き、草むらには紫の小さい花房をつけた草藤がはひまつはり、人工の加はらない自然のままの閑寂な地で、私はこのあたりが好もしくて、心の屈した時などは独ここへ来て、足もとから雉子の飛び立つのに驚かせながら、瞑想にふけつたり、感傷のやり場とした事である。」

写真：藤田富子『椿山荘記』私家版、昭和27年（1952）より

32

藤田さんの時代になっても、山縣がこだわった水景の素晴らしさは十分に伝わっていたようです。藤田平太郎さんの奥様、藤田富子さんが記してらっしゃる『椿山荘記』（昭和 27 年）にどんなことが書かれているか、ダイジェストで見てみましょう。

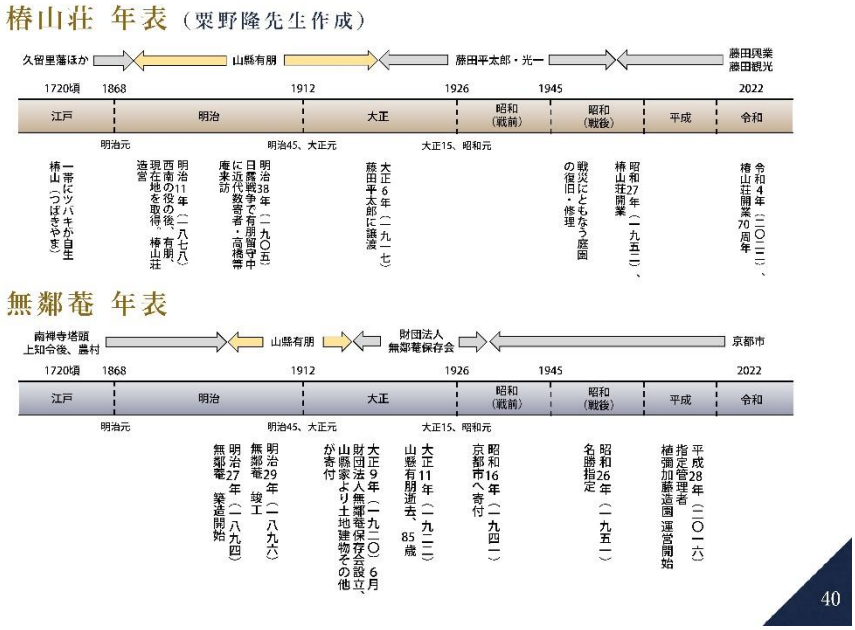
> 「古香井のほとりでは、（…）私はこの辺りが好もしくて、心の屈した時などは独りここへ来て（…）瞑想にふけつたり、感傷のやり場とした」

富子さんが眺めていらっしゃった古香井は、庭園マップのなかでも 11 番と記されており、現在も変わらず井戸があります。山縣さんや藤田さんが眺めた井戸は、今現在私たちが眺めている井戸と同じなんだな、と感じていただけると思います。

ところで、先ほど粟野先生から、山縣さんにとっての庭師というお話をしていただきました。

この四代目岩本勝五郎さんが椿山荘を造り変えて、また山縣さんは勝五郎さんを大変信頼し、熱いものがあったということも触れていただきました。
私の地元にある無鄰菴を手掛けた庭師は七代目小川治兵衛という方なんですが、山縣さんが京都で無鄰菴を造り始めた当時、山縣さん 58 歳、治兵衛さんは 35 歳でした。皆さま方、七代目小川治兵衛という方はご存じでいらっしゃいますか？現在ではたいへん高名な方ですが、山縣さんのこの無鄰菴でデビューをされたんです。まさに治兵衛さんにとってデビュー作であり、その後大成していかれるんですね。

ここからは、無鄰菴の話をしていきたいと思います。
この無鄰菴、こちらは東山の麓にあります。先ほど粟野先生から東京というのは谷戸地形で崖線があり、そのような高台にお庭を作るのが一つのステイタスシンボルであって、山縣さんは目白台地を選ばれ、椿山荘を建てられたとお話いただきました。では、京都はどんな地形か？皆さま、ご存知でしょうか。
京都は、京都三山＝東山、北山、西山に囲まれた中に平地があります。ぺったんこです。ですから、この椿山荘のように大きな高台と低い低地があって…、というお庭はなかなか無いんですね。山裾のところだけがそのようなお庭を実現できるわけですが、椿山荘が俯瞰して眺めるお庭だったのに対して、この無鄰菴は仰観するお庭なんですね。 景色をぐーと見上げていく、そんな地形の場所を山縣さんは別荘として選ばれたわけです。



(明治 27 年から 29 年にかけて造営された)無鄰菴は、大正 9 年、山縣さんが 82 歳の時に山縣家で構成された無鄰菴保存会に譲渡されました。80 歳のときには藤田平太郎さんに椿

山荘をお譲りになられ、82 歳の時に無鄰菴もお預けになられて、その 2 年後の大正 11 年、お亡くなりになられるわけです。無鄰菴はその後昭和 16 年に京都市へ譲渡され、昭和 26 年に国の名勝庭園、国の文化財に指定されております。ちなみに建物が文化財になりましたら重要文化財、国宝という言葉を使います。お庭が文化財になったときには名勝という言葉を使いまして、無鄰菴は（国宝に負けず劣らない価値があるということで）名勝庭園になったわけです。

もう一度改めて、先ほど粟野先生がお作りになられた椿山荘の年表と、無鄰菴の年表を重ねさせていただきました。字が小さくて見えないかと思いますが、大体重要なところだけ取り上げさせていただきます。
山縣さんはざっと、40 歳から 80 歳までの 40 年間をこの椿山荘でお過ごしになられたようですね。それから椿山荘を造られた 40 歳から 18 年後、すなわち 58 歳の時に京都の南禅寺で別荘無鄰菴をお造りになられ、24 年間、82 歳まで所有されたことになります。
ちなみに京都市には指定管理者制度というのがありまして、現在無鄰菴の所有者は京都市＝行政ですが、その運営、マネジメントについては、平成 28 年から私の職場である植彌加藤造園が担当しています。お手元の『サラサラ通信』や無鄰菴パンフレットなども、私ども植彌加藤造園のスタッフで作らせていただいております。

もう一度、この無鄰菴の名勝庭園、文化財としての位置づけを再確認しましょう。文化財になったのは昭和 26 年、無鄰菴が 55 歳の時に、文化財になってるんですね。現在は 126 歳ですので、文化財になってからの歳月の方が長いとうことが言えるかと思います。
文化財になりましたらね、文化庁は、名勝になった指定理由、指定説明文をちゃんと公表されるんですね。公表された文章がこちらです。

名勝無鄰庵庭園

指定年月日： 1951.06.09(昭和26.06.09)

（三）無鄰菴

詳細解説：

無鄰庵は明治二十七、八年頃山縣有朋の別邸として築造されたものである。 ①東部に三段よりなる滝を落し渓流を作り澤渡をおき、やかで渓流を広くして池の趣を現わし、再び水流となし池の流れと合して西に導く。水は常に浅くゆたかに小波を打って美しく流れ、二、三箇所に落水を作っている。 水辺の②芝生は広い水面とともに明るい近代的庭景を与えるに役立っている。樹林を超えて③東山の諸峯は借景となる。明治時代における優秀な庭園である。

①躍動的な水の流れ　②明るい芝生広場　③東山の借景

国指定文化財等データベース（文化庁）より　43

その文章を読み解きますと、大きく三つのことがわかりますね。黄色く描かれているところがまさに水景です。躍動的な水の流れをたたえていることが示されておりますし、緑色のところは明るい芝生広場のことを評価してます。そしてこのオレンジ色のところは、東山の諸峰が借景となっているということですね。このように、明治時代における優秀な庭園であるとして、また文化財として無鄰菴をたいへん評価しています。
また琵琶湖疏水は明治 23 年に出来上がったんですが、この疏水の水を初めて邸宅に取り入れたのも無鄰菴です。その後、無鄰菴を皮切りに南禅寺界隈は別荘庭園ができていきます。つまり治兵衛さんの作庭がこの後続いていくわけですが、まずはこの無鄰菴です。

無鄰菴　京都・南禅寺

平成25年（2013）撮影

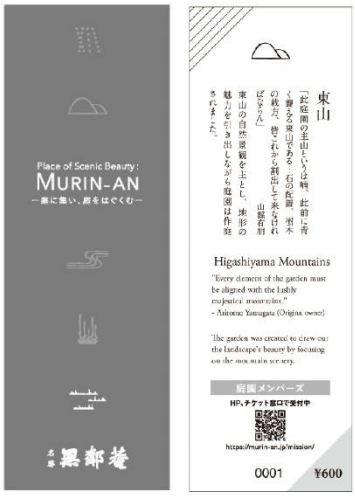
無鄰菴は三角形の地形で西側に建造物がございます。このように視点場視対象が明確なんですね。東側＝東山の借景を眺めるお庭になっております。先にも少し触れたように、無鄰菴と椿山荘との地形の違いを強く感じるところですね。

実は、弊社植彌加藤造園は指定管理者として無鄰菴を運営していく上で、平成 28 年に 5 種類のチケットを作りました。お手元の資料の中にも、実は５つのチケットのうちの１枚が入っております。これは 600 円の入園料に代わる領収書替わりとなりますが、ただの領収書を渡しただけでは面白くないですものね。山懸さんがお庭を語っている言葉をチケットに綴らせていただきました。東山、流れ、野花、苔と、通常はこの 4 種のうちどれかをお渡しします。ただし実はもう 1 種類が存在します。この青色のチケットは、雨の日限定のスペシャルチケットなんです。雨の日だけ、入園いただいた方にお渡ししています。

「中にーきは目だちてあはれふかきは雨のけしきなり」

山縣さん、雨の日大好きだったんですね。雨の日の無鄰菴は最高、と山縣さんおっしゃっておられるので、雨の日は、特別に雨の日のチケットをお渡しさせていただいております。

①チケットの工夫－東山

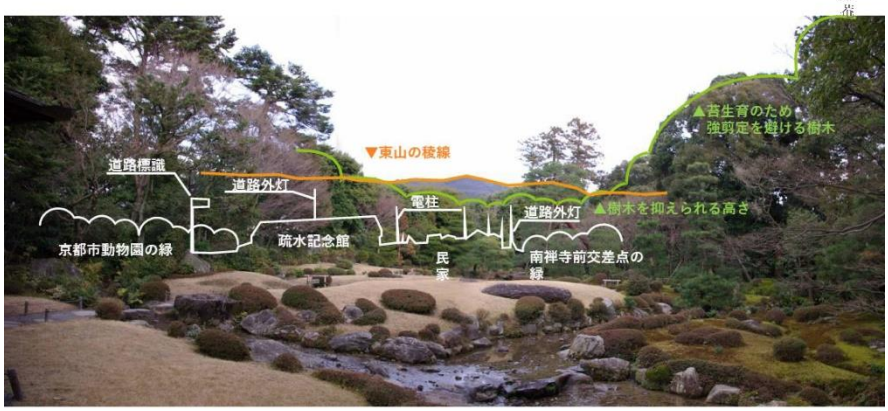


今日は時間の関係で詳しくご紹介できませんが、まず、この東山ですね。東山のチケットお持ちの方いらっしゃいますか。
無鄰菴は東山がしっかりと望めるお庭です。山縣さんがインタビューの中でどのように語っておられるのか、言葉が残っております。

> 「然しこう見渡した處で、此庭園の主山というは喃、此前に青く聳える東山である。而してこの庭園は此山の根がでばった處にあるので、瀑布の水も此主山から出て来たものとする。さすれば石の配置、樹木の栽方、皆これから割出して来なければならんじゃないか喃」

すごいですね、日清戦争から帰ってきたばかりの山縣さん。軍人としての山縣さんのイメージが強いと思いますが、思いっきりランドスケープアーキテクト。ちゃんとこの場所はどういうところか、読みとってグランドデザインしてはります。瀑布の水も主山から出て来たように・・・。そのように東山を主山として捉え、地形を読み取ったわけです。そういう感覚のある方ですから、先ほど粟野先生のお話しにもありましたように、早くから田村剛先生等、多くの方から「軍人山縣有朋、ちゃいます。この人は造園家です」、そういった評価をされていたわけですね。

①東山の借景　外縁樹木の修景



□ 背景に建物　■ 東山の稜線　■ 修復剪定に見出されたライン

①東山の借景　外縁樹木の修景

平成25年（2013）撮影

ただ、ひとつ残念なことに、2007 年（平成 19 年）にこのような状況になっています。これ、わかりますか？外縁の樹が大きくなりすぎて東山が見えにくくなってる、こんな頃がありました。そこで、私は所有者京都市さんに提言をさせていただきました。修復剪定しましょう、と。あんまり張り切って切ると後ろの建物見えちゃいますからね、背後の建造物からの遮閉という機能は保ちつつ、きちっと修復剪定して東山の景色を取り戻しましょうと提言しました。

この当時、外縁の樹木が大きく茂りすぎて光が入らず頭でっかち、これではあきません！外縁部分の樹木の高さ下げや枝抜きをして林床に光が入るようにし、中枝の生育を促進するようにしました。ばっさばっさ落としましたよ。そうすることによってやっと光がしっかりと入るように取り戻していったわけです。
さあ、このビフォアアフターでご覧になっていただきます。
［修復前の写真］これだったら、山縣さん泣いてはりますよね。
［修復後の写真］瀑布の水もこの主山から出て来たように、東山が見えて無鄰菴に繋がってくる、こういう景色を今日では見ることができます。
私は当時このプロジェクトを通じて、時空を超えて山縣さんと語りあった、そんな気がしました。東山を取り戻して、瀑布の水もちゃんと取り込んでいますよ、とそんな思いで語りあったそんな気がします。

流れのチケットをお持ちの方もいらっしゃると思います。山縣さんは大好きな水景を無鄰菴でも語っていらっしゃいます。
従来ですと主に池を拵えたが、川の方が趣知があるということで、山縣さんは滞留した池よりもさらさらと流れる流れが好きだと語っていますし、奥さま貞子さんに造ってあげた別邸、新々邸（さらさらてい）という名前も水景好きの山縣さんならではですよね。
こうして無鄰菴には水景を取り入れて三段の滝から沢飛びがあり、池を越して流れがある、これが特徴であります。

その他にも山縣さんが語っていらした庭園観をご紹介しましょう。

「川畔には、岩に附着たように低く躑躅を作るつもりで、稾駝師（植木屋のこと）に刈込みを命じてゐるのだ」

稾駝師（たくだし）という言い方、これは見下ろしたような蔑んだ言い方で、稾駝というのはすなわち駱駝ですが、植木屋さんのことをそのように呼んでいます。椿山荘をお造りになられた岩本勝五郎との信頼関係は深く、庭師としてちゃんと認識されるんですが、京都ではこの 35 歳の名も知れない治兵衛さんのことを最初は稾駝師、そんな言い方をされているのです。でも、治兵衛さんは山縣さんの思いにしっかりと応え、当時の写真を見てもサツキツツジは低く刈り込まれております。現代もその山縣さんの思いを私どもがしっかりと具現化しております。
また、

「此地の稾駝師などは瀑布の岩石の間に歯染（シダ）を栽るといへば不思議に思ふ。」

山縣さんは、滝のところにシダを植えると指示しているという、そんな記録もあります。

椿山荘が明治 43 年の『名園五十種』で高く評価されていたように、無鄰菴もまた明治 42 年の『京華林泉帖』に掲載され、造営当初から高く評価されていたことがわかります。現代もその思いを大切にしております。
治兵衛さんから見た山縣さん、後年、美術評論家の黒田天外からインタビューを受け、その記事が大正 2 年の『続々江湖快心録』の中で書かれているんですが、つづけて紹介しましょう。

「山縣さんが無隣庵をお作りになること丶なり、五尺くらゐの樅（もみ）を五十本栽へろといふ仰せつけでしたが、」

5 尺は 1 メートル 50 くらい、そのモミの木を 50 本植えろ、とこんな指示があったと。現在このモミの木は大きな樹木になって存在しています。

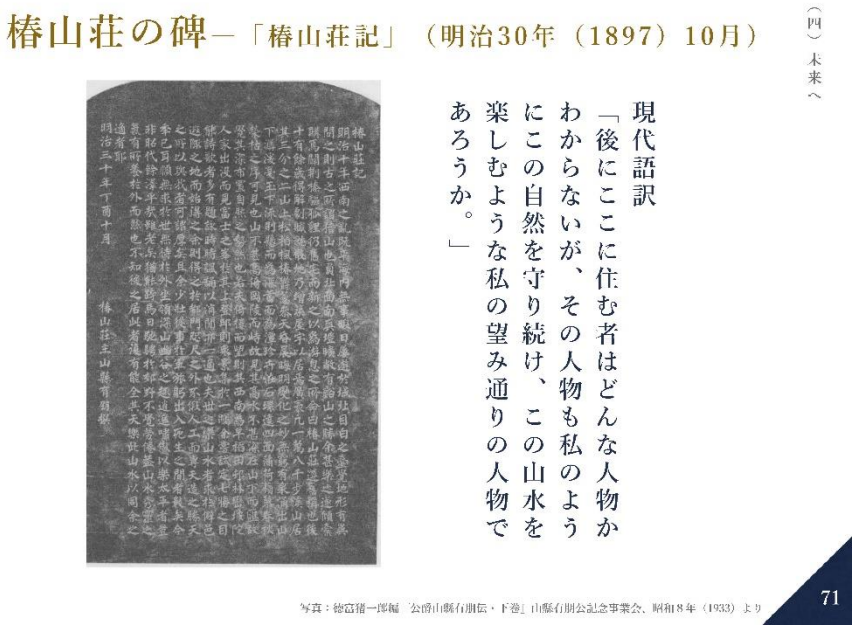
「其頃樅など丶いふものは庭木につかいませんので一向なく、漸（よう）やく方々から集めて調へましたが、只今では何處の庭園でも樅を多く用ひ、またどうだん、柊、南天などを使ひますのも、山縣さんが嚆矢（こうし）でム（ござ）います。」

モミの木は庭木としては使わへんので、そんなんぜんぜんあらへんわ、でも、一生懸命あっちゃこっちゃから探してきました、と。今ではどんなお庭でも使っているモミの木、ドウダンやヒイラギ、ナンテンなど、こんなん使うのは山縣さんが初めて言わはりましたと、治兵衛さんは語っているんですね。

また、同じインタビューで以下の様にも語っています。

「私が今日にまでなりましたのは、全く山縣さん、中井弘さん、伊集院兼常さん、此の三人の御蔭で…」

このように治兵衛さんは庭づくりを山縣さんから教えてもらったと言っているわけです。その後、南禅寺界隈別荘庭園群や各所で名人として活躍していくわけですが、最初に、第一に山縣さん、山懸さんが恩人なんですと、治兵衛さんは語られています。治兵衛さんにとって山縣さんは怖くて、でも自分を支えてくれた先生だ、そんな感じだったんでしょうか。



時間がきました。最後に結びといたしまして、山縣さんが未来に託した想いということでまとめていきたいと思います。
椿山荘にはこのような碑がございます。この「椿山荘記」、たいへん感慨深いですね。山縣さんは椿山荘を建てられた時に、この庭への想いをたくさん綴られております。
実は、無鄰菴にも石碑があるんですね。山縣さんは石碑がお好きなんですね。無鄰菴でもこのお庭が素晴らしいお庭であるということを石碑に記されてらっしゃいますが、椿山荘の石碑には、山縣さんの未来に対する想いが記されていて、たいへん感慨深く思います。こちらはホテル椿山荘東京さんの公式 YouTube の中で公開されていますので、ここで一緒に見てみたいと思います。
―ホテル椿山荘東京 公式 YouTube より紹介―
［山縣は椿山荘の碑に最後この様に残している。

「後にここに住む人物も私のように自然を守り続け、
この山水を楽しむような私の望み通りの人物であろうか。」
山縣、藤田、小川、そして私たちへと慈しみ、はぐくまれてきたホテル椿山荘東京の庭園、これからも変わらずにこの庭園の一木一石をそして自然を愛する心が脈々と受け継がれていくのだろう。]

あらためまして、ホテル椿山荘東京さまの 70 周年記念、誠におめでとうございます。
そして山縣有朋さんの椿山荘が造営されてから、本当に尊い歳月を積み重ねられて現在１４４歳、来年には１４５歳をお迎えになられること、たいへん感慨深く思います。
これからもホテル椿山荘東京さまのもとで、山縣有朋さんの椿山荘が大切に愛しまれ、育まれていくことをお祈り申しあげまして、私からの講演は以上とさせていただきます。

ご清聴、ありがとうございました。